

氣 体 休 め

(一) 貧しき分別

我等は敢て名の爲めに働くものではない。仕事其ものが  
 我等唯一の興味であり生命である。世間が何と見やうと他  
 人が何と云はうと、それに拘はる必要は少しも無い、我等の眞

價はそれによつて毫も増減されざるは固より、抑も左様な閑  
 是非に我心を搔亂されんとするのからして、大きな間違であ  
 る。我等は只宜敷技術家としての自家の本分を守つて飽迄  
 其の天職に殉すればよいと。斯く相信じ相戒めて立つの、其  
 當否如何は別問題として、それも確かに一つの覺悟である。  
 加之今日の技術家にあつてはそれが寧ろ一般に瀾蕙し浸潤  
 せる唯一無二の覺悟であるかも知れない。此處の天地に身  
 を置き此處の空氣を呼吸して行く内には何時としも無く左  
 様の氣分惹て左様の覺悟が誰も心の底に根ざして來るか  
 やうである。或は左様の氣分、左様の覺悟を養ふべく餘りに

覇氣あり野心ある手合ひは餘儀なく途中からでも此の世界を逃げ了せて跡は尙更斯様な氣分肌合の濃化純化を加ふる許りであると言へるかも知れぬ。

兎に角この覺悟もよからう。是非は別問題として誰もが或確かなる意氣或手強き信念に立つと云ふ事柄自身は無論各自に取つての仕合せである。乃ち若し右のやうな高踏的氣分學者的肌合ひを以て技術家たる我等が當然の立場だと解するの普通ならば暫く其の一切を許容し得るものとして而して茲に改めて我等の間はんと欲することがある、何ぞや我技術界は果して右の意氣に負かず右の覺悟に耻ぢざる丈

けに誰もが其の内面生活に於て眞に脱俗的であり研究的であり献身的であり即ち其自ら信じて唯一の興味とも生命ともする技術そのもの進善啓發の爲めに全力を傾倒し俱に相寄り相扶けて以て勇往不退轉の英氣を燃しつゝあるであらうか。而して即今見る處の爾の學會爾の雜誌爾の著述乃至爾の言説の凡てが果して然かく徹底し満足せる努力の現はれてあると云ひ得るであらうか。

## (二) 沈黙の人

技術家が若し單に頭腦の人として敢て學者を以て自任し得べき職分であり、若くは單に技能の人として恰も藝術家の如くに立ち得る境涯だとすれば、則ち彼の紛々たる俗界の批判以外に昂然として、寧ろ逆まに天下を俯瞰して足るであらう。が、縦しそれにした處で、凡そ今日の他の學界なり將た藝術界なりが、果して我技術界の如くに然かく無氣力不活潑なるものであらうか。

然り、今の活氣ある社會の何處に又と爾程沈黙せる世界があらうか、今の若々しき學界の何處に又と爾程氣焰の揚らぬものがあらうか。見よ、爾の學會には今能く何程の權威があ

る、爾の雜誌爾の言説には今將た何程の強味がある。爾は己れを以て敢て他に問ふの勇をすら失へるのではないか、さらば又何として他を教ふるの概あるを得ん。爾は進んで自己の便宜を圖るにさへ慮せるではないか、さらば又何として斯界の結合を鞏うするに意あらん。

切言すれば爾の學會は僅に洋行歸りの人達に義理合のお土産演説を強むんが爲め許りに開かれつゝあるのではないか、それすら格別廣くもあらぬ會場が何時も半ばは見へ透く許りの淋しい集ひではないか、甚しきは堂々たる大衆を擁する一分科にして今尙餘所の學會の店借り身分に辛うじてお

茶を濁せるさへあるではないか、會費の郵送と會員名簿の一行に幽けき連鎖を保つて、哀悼に堪へずの一句を最後の帳消しとせらるゝ以外殆ど何の利害をも感ぜぬ多數と、それを熱心に誘導し刺激し共鳴せしむる所以の方法をだも講せぬ幹部と、互に相寄り相俟つて、先づ何うやら今月號の息が吐けたと云はぬ許りの調子の其處等中に瀾る會報を送受し合つてそれて何う學會の權威が輝きつゝあるのか。

況や爾の雜誌と言説との如きに至つては、夫れは只其内容の量と質とに於て如何に貧弱であり空虚であり將た不用意であるかを強ゐて表白せんが爲め許りに發表せられつゝあ

るのではないか。長者は黙して其經驗を説かず其智識を分たず其感想を吐かず、若者も亦固より黙して其疑惑を叩かず其希望を訴へず其意氣を示さず。斯くして何處に斯界最近の事相に對する相互の緊密なる接觸が保たれ、又は何處に先進後輩をして交々呼吸し感應し共鳴せしむる所以の暖か味が湧かう。抑も亦何處に其自ら信じて唯一の興味とも生命ともする技術其ものゝ進善啓發に對する努力と充實との實證を得やう。

内に其仲間の爲めにさへ我手を貸すに懶く其専門の爲めにさへ我力を致すに吝なる爾が、外に、他の世界に對つて其意

氣を伸べ得ず其の面目を張りがてなるも亦固より其處ではないか。内に其團結の必要を解せず其協力の鞏きを求めずして、獨り外に其權威の張り尊敬の加はらんを期するのそれは尙更以て無理ではないか。即ち爾は其内にも外にも其同輩にも後進にも只等しく一様に踏阻し逡巡し去つて、勢ひの究まる處、餘儀なく孤立の境涯を活き、怯懦なる生を運び、熱なく意氣なく精彩なき所謂片隅の世界を尙更小さく勝手氣儘に切縮めたてんでばらゝの門戸にのみ閉ぢ籠つて、僅に特殊の技能の小窓から陰氣臭い呼吸を續けて居るのではないか。されば其陰氣臭い呼吸と共に吐かれた我等の興味は技術で

ある「我等の生命は仕事其ものである」との分別に、抑も彼の餘儀なき悟りと諦らめとから何れ程違つた強味が響くのであらう。

見來れば爾のモットも、それは只廣き批判から自己を回避すべく都合よく思ひ付かれたものとしか思へぬではないか。只自分に向つて自己を申譯すべく強ひて構えられたる口實としか考へられぬではないか。而して我等は寧ろ先づ斯かる卑怯な標榜から自己を脱却する處に、其處に初めて我等技術家の立場が見出さるべきものだと思はざるを得ぬ。

### (三) 連鎖の有無

「社會が或専門若くは其専門に屬する人々を信頼し尊重するの度合は、畢竟其専門に立つ人々相互の連鎖の大小強弱如何に比例すと知らずや」

とは曾て米國土木學會々頭であつたペンツエンベルヒ氏が其會員の自覺を促すべく喝破し去りたる言葉である。今日我等が危然たる大衆を擁して、然かも其活動の舞臺の餘りに狭小に、其保持する勢力の餘りに微弱なる所以のものを思へ。誰か能く此一語に其肺腑を貫かれずして止まらう。

同じく米國土木學會々頭であつたジョン・ベンゼル氏も亦曾て會長辭として述べて曰く、

「我等技術家は其個人的成功の顯る見るべきものあるに拘らず、實は其職分的氣分プロフェッショナルスピリットに於て遙かに他の専門の人に後れ殊に其團結的努力コヘシブに於て愈々遙かに後れたるを見る」と、一語更に前者の云はざる所を補ひ、一と深く我等が最後の

急所を剔れるでは無いか。著述に、雜誌に、學會に、言説に、將た社交に、凡そ其團體的結束を鞏固する所以の手段に於て爲さざる盡さざるなく、其の職分的權威を發揚するに於て些の機會をだも捕捉するを忘れぬ米國斯界の今日ですら、尙且つ斯

様の警告を必要とするまで、爾他の社會に比しては遙に其努力と充實とに缺くる所以のものあるを思へ。而して直ちに顧みて我等が左右を察すれば如何。吾人自省の第一歩は即ち歴然として指點し得べきではあるまい乎。

#### ④ 本來の立場

一體技術家がさも學者らしく又は藝術家らしく、只我頭腦を頼み、我技能に信じて、社會と離れ世俗と絶した獨善獨我の境地に其立場を見出さんとするの、それが果して正當なる見

解であらうか。

如何にも、我技術界には能く頭許りて立つ人々がある、又は單に腕許りて立つ人々もあるが併しながらそれが果して技術家其もの、本來の立場たるであらうか。

否、我等の見る所に於て、技術家は天の人に非ずして寧ろ地の人である、仙人ではなくつて却て俗人である。縦し渠等の頭が常に天上の星に向つて擡げられてあらうとも、渠等の足は必ずや地を離るゝことを許されては居らぬ。縦し渠等の腕に人間離れのした技能の牙えがあらうとも、手にする仕事は常に俗界の掟——經濟的原則——によつて掣肘されねばならぬ。

されば渠等が一方に *dy da* の高尚なる數理を手玉に取り、精緻なる土木、鐵石の處理、操縱を擅まにすると、然かも他方には必ずや直接社會に接觸し、多數の人間を指揮して、事業の企畫、經營、乃至俗の俗たる何圓何錢の金勘定をまでも敢てせねばならぬ。縦し一方に高く人生を超越せる科學の研鑽に其頭を悩ますとも、他方には必ずや實社會の物質的進歩と追隨し、國家の輕濟狀態と呼應して、動かねばならぬ。

然り。渠等技術家は到底單なる學者でも藝術家でもない。渠等は其頭の人たるに於て學者に近けれども、然かも同時に又手の人たるを忘る可からざる筈である。渠等は技能の人

たるに於て藝術家に近けれども、然かも同時に又社會の人たるを忘る可からざる筈である。此の如くに渠等の受持つ任務の複雑であり、多端であり、然かも特に仙俗二面の交渉を必要とする所に、敢て學者ならず藝術家ならざる渠等技術家本來の面目と其固有の立場とが存するのではないか。渠等が單に脱俗超凡の人たり能はず、又は獨善、獨我の士たり能はざる所以のものも亦願る明瞭ではないか。

縦しや技術に關する仕事、其ものは極めて古くからあつたにもせよ、それが新たに一つの専門として認められ來つたのは、西洋にても僅に十九世紀以後のことである、まして我國て



は尙更最近三四十年のことにしか過ぎぬ。然かも此最も若い専門が専門として出現し來つた所以のものは、之れ畢竟現實社會必至の必要に迫られたるが爲ならずして何である。即ち然かく現社會の活動に促され其要求を充さんが爲めに生れ來つた技術其ものが、何處に生々たる社會を離れて勝手に存在し發展し得べき理窟があらう。技術は其成立からして、然かく俗世界のものではないか。さらば其必要を現實に懸け、其目的を國利民福に置く、我若き技術を相手の技術家が、又何の點からして社會の批判以外に立つ仙人氣取り學者氣取りであることを得やう。

敢て云ふ。技術とは是れ決して生氣無き學と術との謂ひではない。寧ろ社會的に鮮味新味の最も潑刺たる經世濟民の實務である。技術家とは是れ決して自然界許りを相手の科學者でも土木鐵石の處理操縦にのみ精しき技工者でもない。寧ろ火花を散さん許りに花々しく勇ましかるべき活社會の活人である。新時代の新人である。自然界と人間界とを其雙手に提げて能く是が連鎖の機敏を穿つに足るもの即ち渠等である。一面には物質界の深秘を探り他面には國家社會の要求に察して以て相互の脈絡を通じ、依て人類一般の進歩を齎らし、及び其文化に應じて多々倍々活躍進すべきもの即

ち渠等である

然り而して此見地此信念の若し能く渠等の心裡に確乎たるものあらば今少しく鬱勃たる元氣の渠等に漲らねばならぬ筈である。今少しく花々しく爾他の社會に名乗を上げて其武者振を示さねばならぬ筈である。『我は技術家なり』との意氣込には恐らく他を以て代ふ可からざる重大の任務を負擔し遂行しつゝある所以の重みが響かねばならぬ。是非の批判は兎もあれ現代の文質的文明を今日の世界に持來らしたるものは之れ我等が先輩に非ずして誰ぞやと敢て他を顧眄するの氣慨が籠らねばならぬ。我等が頭腦我等が手腕な

らばこそ能く總ゆる科學上の研究を咀嚼し玩味し綜合して以て的確に偉大なる功績を現實社會に樹立し築成し得るのであるとの強みが透らねばならぬ。

さればこそ然かく現實に社會の人たるべき渠等の口から却て社會上の立場如何を顧慮するの要なしとするは是れ餘りに自己を輕んずるの言である、又は餘儀なき一種の諦めてある、若くは苦しませぬの瘦我慢である。さる不見識なる遁辭を構へて敢て自ら糊塗せんとするが故にこそ尙更世間を通じて其遠慮に付込み其困循に乗して、勝手氣儘の横着を振舞はしむるではないか。さる不徹底の悟りを求めて

強ひて退嬰萎縮を事とするが故にこそ、尙更これを己れに、自覺し反省して以て其足場を立て直し、能はぬではないか。

### (五) 口實を去れ

切言すれば、即今社會の我等に與ふる評價と待遇とは之れ畢竟技術家爾の内の生命の空虚と貧弱とを表示し反襯したるものならずして何である。此意味に於て社會は寧ろ公平である。爾は却て明かに自家の研醜を世間から見取られて居るのである。爾の缺陷、爾の弱點、それを省察しそれを改良

してかゝるに非ざるよりは、何處に爾の影をして爾自身よりもより濃く、より美しく見するの法があらう。爾の如く然かく多數の同志を擁し、又爾の如く然かく現代文明の啓發に戮力しつゝあるに拘らず、尙且つ其社會的勢力の然かく微々として振はざる所以のもの、抑も之れ爾自身の招く處たらずして何である。

我等は彼の社會を他所にして、別に技術家の高踏的立場を見出し得るか、のやうにプレテンドする卑怯なるモットーを先づ我等御互の間から擯却し去らんことを望まねばならぬ。